

福祉文化通信

2012.9.25
vol. 69

●発行所/広報委員会
稲田泰紀 安徳大輔 河西正博
関矢秀幸 馬場 清
●制作: 山河/印刷: 飛泉社

~well-beingへの道~

日本福祉文化学会事務局 〒165-0026 東京都中野区新井2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax: 03-5942-8510 E-mail: fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp

福祉文化実践学会賞決まる!

【推薦理由】
特定非営利活動法人マイハート・インタナショナルは、様々な障害のある人の美術作品展である「福祉MY HEART展」を1986年から継続して開催している団体である。スタート当時、福祉施設職員であった。表現事である熊木正則氏の、施設で描かれた芸術作品の発表の場を作りたいとの思いからこの美術展は始まった。熊木氏は施設での発表ではなく、公立の美術館での美術展開催にこだわり、数々の困難を乗り越え、青梅市立美術館での美術展開催にこぎ着けた。以来、20年以上にわたり、途中何度かの中断の危機を乗り越えて今年23回目を迎えることになる。

その途中で、熊木氏自身がフランスの護謄学校との交流があったことをきっかけにフランスからも作品が出品され、2007年には、同展20回を記念して、フランス・トゥール市で開催された。また2008年には、中国・上海での開催も実現。

今年もフランス、中国からの出展も加え、計85点の作品が展示される。



日中共同開催の同形式に参加した日本の視覚障害児17名(2008年・上海市)
横断幕の和訳(「パラリンピックを迎えー2008 中国、日本、フランス知の障害者作品展」)

第8回受賞団体 「特定非営利活動法人 マイハート・インタナショナル」

代表 熊木正則氏

「福祉文化実践学会賞」とは:
「福祉文化実践学会」は、福祉文化実践学会誌「福祉文化研究」に連載された「報告」小論「おまかせ福祉文化研究」に連載された「論文」小論「現場実践」等、さらには、本学会の会報「福祉文化」や「福祉文化通信」の中から最も優れた現場実践やボランティア活動等に対して与えられるものである。

その美術展の開催趣旨は次の通りである。

- 1 心身障害児者の美術活動を、広く一般の人びとに理解してもらうことを目的とする。
- 2 心身障害児者の美術制作活動の向上に寄与し、心身障害者が作品に自信と誇りと喜びを持つことを目的とする。
- 3 心身障害児者が美術表現活動を通して、芸術文化面からの社会参加、文化創造、国際交流への可能性を追求していくことを目的とする。

出品参加した重症心身障害児者療養所施設的生活指導員は次のように話しています。

「私たちの施設のような重症心身障害児者の入所施設で寝たきりになっていく人たちは、これまで美術館に入ったこともなければ美術館で作品を見たこともないです。ましてや自分たちの描いた作品が美術館に展示されることなんて想像もつきませんでした。(中略)

この美術展には、入所者の作品参加と同時にバス外出という私たちにとっては大きな経験と喜びがあります。」

受賞式は9月29日に開催される、日本福祉文化学会岡山大会にて行われます。

歴代の受賞団体を紹介いたします。

- 第1回受賞 「新潟福祉文化を考える会」
第2回受賞 「NPO 法人音楽の響」
第3回受賞 「わかりやすい191かいくづくりいんかい」(東京都国立市)
第4回受賞 「青葉園」

- 第5回受賞 「静岡福祉文化を考える会」
第6回受賞 「社会福祉法人 小年會」
第7回受賞 「芸術教育研究所・東京おもちゃ美術館・NPO 法人日本グッド・トイ委員会関連グループ」

※歴代の受賞団体の活動内容については、学会ホームページにも掲載されていますのでご覧ください。

新・福祉文化シリーズ2 アクティブリティ実践とQOLの向上

「編者まえがき」から



新・福祉文化シリーズ第2巻
編集代表 石田 易司

オーストラリアに滞在することがあり、このような国では、福祉というものが日本とは違っているに違いないと、障害者や高齢者の活動現場を探求して見ました。すると、1981年の同窓会害者年の翌年に発行されたガイドラインに従い、ユニバーサルデザインがスキーやキャンプなどの野外活動施設にも及んでいるのです。垂直になっているのが当然だと思っていたけれど、壁面が車椅子でも入れるように、斜面になっています。いろんな場面に障害者が参加することを想定しているのです。これこそが福祉文化だと思います。高齢者施設でも驚かされてきました。髪をきれいにセットしている女性に聞くと、1週間に1度は、若い頃から通い慣れた街中の美容院に、日本と言う介護保険の軽費で連れて行ってもらえるというのです。旅行はもちろん、競馬でもカジノでも本人が望むなら、公的な経費で当然支援可能だといえます。

戦後、日本社会で国家の責任で福祉というものが制度化された背景には、憲法第25条の「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という文言があります。国民の生活権は国家によって保障されたのです。しかし、「最低限度」という言葉が曲者であり、例えば施設の入所介助についても1週間に2回しか入浴させないという「入所者入浴させない」と書いておられる。一般的な運営です。また、介護保険ができる以前の措置時代は言うまでもなく、介護保険でもそれ以上の人員配置ができる経費を行政が施設に保障していないというのが現状でしょう。しかし、オーストラリア的な発想であれば、(中略)最低限度の生活の保障より優先して、したいことをもつとわがまに主張して、自分の生きがいを見つけ、自己実現を図っていく「わがま」が主です。という「言葉」は、現在では否定的に捉えがちですが、私はそれがあつた「草創」の象徴だと思うのです。潜在化しているニーズを顕在化させるために、きちんと自己主張で喚起されなければなりません。(中略)そんなことを考えながら、福祉対象者の新しい生き方を求めるための試みを紹介し、福祉文化という思想をよりたくさんの人に定着してもらおうことが、この本の出版の意図です。

平成24年度北陸ブロック 福祉文化セミナーへの誘い

現在日本国内には、910万人もいる「買い物弱者」と呼ばれる人々がいると言われています。農水省調査。本年度のセミナーでは、新潟県長岡市・同地域を会場に、「買い物弱者」を支援する、ある山間地域住民の活動を取り上げます。

サブテーマを、「全ての人が日頃物に参加できる地域づくり・文化づくりに考える」として、シンポジウムとフィールドワークを平成24年11月23日、24日に開催します。

(詳細は別紙要綱を参照ください。)

新潟福祉文化を考える会では昨年「買い物弱者」をテーマにした小国地域の実践は、他の地域においても重要な示唆を与えてくれるのであり、ぜひ、多くの方々の参加をお待ちしております。

北陸ブロック・五十嵐貴一



写真: 行政庁舎を活用した「もったいない村」

関東ブロック 研究交流会報告

(8月4日於立教大学池袋校舎)

「認知症高齢者のひとり暮らしはどの程度可能か?」実践例をとおして方法と課題を考える」と題した研究交流会を開催しました。

認知症と診断された8年、94歳8か月の母親をひとり暮らし体制でサポートしている田中誠子さんをおき、ひとり暮らしを選択した経過、兄弟の関係、経済面、帳簿方法、施設開のサービス担当者会議、その連絡方法、認知症の推移に伴う病状や対応、医師(精神科、内科、呼吸器科)との連携、施設の選択法、また、ご自分の生活も維持しつつ、母親もその人らしく生きていくことの重要性が語られました。参加者は29名。

福祉現場のケアマネ研究者、学生、認知症家族の会のスタッフ、企業経営者、施設経営担当者、さまざまな立場の方の参加があり、有意義な意見交換が展開されました。

関東ブロック・梅津進子



写真: 実際の介護体験に皆さん熱心に耳を傾けていました。

訃報

日本福祉文化学会創設者の一番若潮康子様が、9月5日脳梗塞にて死去されました。(85歳)

学会役員一同、謹んで哀悼の意を表します。ご生前のご厚情に深く感謝するとともに、故人のご功績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

次頁にて一番若潮元会長のご逝去に際し、故人を偲ぶ文章を掲載させていただきます。

新規会員紹介

2012年8月31日までにご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせ致します。

個人会員: 宮川深雪、杉本博(北陸) / 若井奈緒子、加藤未礼、中山洋祐、松原徳和、李京真(関東) / 大深俊明、守屋典季、高尾馨(中国四国) / 池田さおり、古賀由、佐野光彦(関西) / 坪田章彦(九州) (敬称略)

団体会員: 芸術教育研究所

「災害と福祉文化」速報

「災害と福祉文化」委員会委員長代行 石田易司

1. アンケートの概要について

震災から1年余りが過ぎた2012年7月初め～月末まで実施した。往復はがきによるアンケートである。趣旨は①会員の災害支援活動を把握する②記録として残す③学会として今後の支援活動へのヒントを求めるの3つであった。

2012年8月9日現在、発送390通、有効送付数387通、返信96通で、有効回答率24.8%

2. 会員の災害支援活動の状況

支援活動を行ったものの67人、行わなかったものの28人で、約7割の人が支援活動を行っていた。(ただし、この数値が会員全体の動向を表しているとは判断はしにくい。活動をした人のほうが回答した率より高いはずであるため)

3. 主な活動内容(災害時の福祉文化活動)

・専門性を生かした活動(介護、レクリエーション、ボランティアコーディネーションなど)
・復興支援:まちづくり活動(ガレキ処理や清掃活動、被災地の物品販売やチャリティコンサートなど)
・募金活動(日本赤十字社や共同募金会への募金だけではなく、関係のある団体や組織への募金も行われた)

4. 「活動の継続について」

単発の活動:44%と、長期にわたる継続的な取り組み:56%となっている。これは専門性を生かした活動に取り組みたり、組織的に活動したり、被災者のニーズ把握をするためには時間をかけた継続性のある取り組みが必要であるということを示しているのではないかと。

5. まとめと考察

あくまでこのアンケート調査から見た私見ではあるが、福祉文化学会として、あるいは会員個人として望ましい活動は次のようなものだとまとめられる。
A: 募金は一般的な共同募金会や赤十字に送ったり、街頭の募金箱に入れるより、日常的に関係のある、本当に必要だと思えるところに直接送る。
B: あわてて駆けつけることより、仲間や資金を確保し、継続的、組織的にできる活動にじっくり取り組む。
C: 研究者集団としての専門性

が活きる活動を大切に。実践はガレキの撤去だけではない。それぞれの所属団体を動かしての活動が求められる。
D: 大規模災害の場合、県外避難者も多く、長期的に取り組み必要もあるため、被災地だけでなく、それぞれの居住地でできる活動も大切な活動に位置づけられる。
E: 活動の内容は多岐にわたる。どの切り口をとっても福祉文化活動という側面を持っているので、質の高さを求める。
F: 支援活動としてはとらえにくい、レクリエーション支援、文化的な活動、情報提供などに

得意のエリアだと言える。G: ともすれば忘れられがちな少数の人にも目を向ける。
H: 活動をめぐって、被災者の未来に希望が持てる活動に取り組みたい。地域が再生するとか、ボランティアに参加した若者が育つとか、被災地の子どもが元気になるなどの活動である。
会員の活動については実践報告集で紹介することにしている。こうした報告を記録として残し、今後の活動に生かすことが学会としては何より大切なことだろう。



被災地でのボランティア活動の様子。



高齢者施設におけるアクティビティ活動。

研究会委員長 福祉文化よもやまセミナー開講!

7月7日(七夕)の夜、第1回福祉文化よもやまセミナーが行われました。このセミナーは「福祉文化」について、いろいろな観点から考えることを目的として企画されました。
ゼミメンバーは現在13名。年齢も20代から70代までまばらなく、男女比率もほぼ半々。専門分野も職業もバラバラ。遠くは新潟からとまさに福祉文化を多角的に考えるためにはうってつけのメンバー構成となりました。

この日は、まず担当理事の馬場より、開催趣旨とこれまでの経緯について話が聞かれ、その後で園田碩哉顧問より「福祉文化研究の方向性」とも「福祉文化とは何か」を考へる「はやめよう」と題された話がありました。



懇話会による熱い議論が交わされた。

それぞれの話及び議論の内容については、本学会のホームページで公開してまいりますので、パスワード「294buka」(ふくしんか)と入力してご覧ください。また懇話して参加の意思のある方は、これらからでも参加可能。事務局までお知らせください。

気仙沼・大島から学ぶ

3.11のその後

3.11の大震災から1年半を迎えた9月10、11日の両日、14名の学会会員と現地の方の参加を得て、震災支援現場セミナー「気仙沼・大島から学ぶ」を開催した。
10日は雨天で海は美しく光っていた。一行は気仙沼「スポーツからファミリー」で25分、気仙沼・大島の浦の浜に行き、明海荘のバスで大島へ(一番高い「亀山」山頂まで行く。気仙沼市内と美しい景色を堪能。そこから島内を通り、宿泊およびセミナー会場である「明海荘」へ到着)。

先の見えない不安を抱えて、今は1日1日必死です。
先ず始めに、震災後に地域の人たちが立ち上げた「おぢやのみ工房」子ども駅「つばき」の取り組み状況を自己発表、スタッフの皆さんら話を伺った。
2012年1月から始めた工務は、昔から女性たちが日常的に行っていた「おぢやのみ」を復活させるつもりであったが、いろいろ試みた結果、手芸教室を開き「湯き地蔵」を作り、遠征や被災された家族に配るなど、今は訪れる人々に「つばき」のキーホルダーやお土産として販売している。京都に本部のある「湯き地蔵」のネットワーキング「吉田さんの支援も大きい」。

「いま私たちはとにかく必死です。先が見えない不安を抱えながら活動です」と代表の白崎さんの言葉が印象的であった。大島では、夕食は三世代一諸に食べることが現在でも行われており、ここで皆さんは宿舎。
次に、地域で大きな商店を建てた店も住人も流され現在は仮設住宅

で生活。熊谷さん(50歳)から「津波など過去の津波の経験から、前兆など感じ取って大きな津波で避難を促し話を伺った。民話の語り部でもある津波はあちゃん、大島の死者が少なかつたことは「湯き地蔵」が身代わりしてくれたからと思っている。どんな災難にあっても「いのちだけは大切に」して下さい」と言葉が食された。
夕食時には、さんぽばあちゃん大島小学校校長の菊田孝三郎先生、明海荘の村上天樹と大島夫妻お孫さんが入学を前にじくになり、遺影を持って小学校の入学式に出席。や栗刺師の三尾さん、東京から支援に来て、長期にわたる現地に住み込んで、あの口がわんだら、あの子が生活はどうか、変わったか、人々のつながり、子どもたちの様子、仕事のことなど暮らしの全般にわたって話を伺った。



気仙沼現場セミナー「1日目。夕食を囲み交流中」

「気仙沼大島と陸前高田の津波被害にどう寄り添えばよいか」をテーマに学会副会長の石田易司氏の進行で松山真良小学校校長先生と立教大学の松山真良先生(現在、陸前高田に移り住み復興活

とにかく住民との信頼関係を作る、そこがスタート。
2日目は、会場を大島小学校に移動。家族や子どものことに触れると、声が詰まってしまう。悲しみは深さはいかばかりかと思わずにはいられなかった。
「復興した」との報道と現実のギャップに不安を感じる。こと、何のためにここに来たのかかわらない訪問者の姿に唖然とする。話はずきなことだ。
「復興した」との報道と現実のギャップに不安を感じる。こと、何のためにここに来たのかかわらない訪問者の姿に唖然とする。話はずきなことだ。

動支援に関わっている)の活動報告と質疑応答がされた。
菊田校長先生は昨年4月に赴任。ここが母校でもある大島生まれ。写真や新聞報道などを通して子ども達の活動状況を丁寧にこ報告いただいた。被災地は壊滅。土日はボランティア受け入れて学校を開放してくれたこと、先ずは、戦後の復興と震災後の島の状況を重ね合わせ、赴任のEから子供たち「歌の山」(歌の山)を教え、動ましていること、1月にアメリカ海兵隊が上陸した時、これで助かると思ったこと、学習支援に来る大学生、立教大学など、を持ち帰る子ども達に笑顔を戻り、家から出て来てくれる子どもが増えてきたこと、そして「母校で教員生活の最後を過ごせることは何かの巡り合わせ。大島のために役に立つことを誓いたい」と話された。
松山真良先生からは「Eを振り返り、まず、とにかく現地の人と人間関係を作ること、そこから支援は始まる。」「専門職は使われている。本人も被災している。自分のしんどさを誰にも言えない。」「専門職を元気にする支援を考えた自分とは活動している。陸前高田に高田サトウハウス(立教大学でまよまま支援会を確保して運営。車もコミュニティ福祉学で確保。拠点もコミュニティ福祉学を利用して活動中。学生にもボランティアが目的ではなく、そこから交流をどう進めていくかを考えていること。また、「自治体(陸前高田)は職員が死にました。行政機能の再構築が聞かれています。」「支援は大きな課題である。ことと添うらた。これから被災地へどう寄り添うか。私たちは、こうした現実を学び活動を組み立てなければならぬ。」「詳細は、ホームページに掲載予定です。」(記) 事務局長磯崎孝子